

魯迅輯『古小説鈎沈』校釈

—『幽明録』(五)—

富永一登

34 文翁常欲斷大樹。欲斷處去地一丈八尺①。翁先祝曰、「吾若得二千石、斧當着此處②。」因擲之、中所欲一丈八尺處②。後果爲郡。「御覽七百六十三」※鄭晚晴輯注本三五頁

【校異】 ①「欲」、底本・鮑崇城本作「砍」。今據御覽改。下③「欲」字亦同。②「着」、底本・鮑崇城本作「著」。今據御覽改。

【注釈】 文翁 生没年未詳。漢・景帝の時、蜀郡の太守となり、学校を作り蜀の学問振興に貢献する。武帝の時に各地に学校を作ったのは、文翁の教えによる。『漢書』卷八九循吏傳に伝がある。二千石 漢の太守の俸禄が二千石だったので、二千石は太守の代称となる。『漢書』卷一九上百官公卿表上に「郡守、秦官、掌治其郡、秩二千石。……景帝中二年更名太守。」とある。

【訓読】 文翁 常て大樹を断たんと欲す。断たんと欲する處は地を去ること一丈八尺なり。翁 先づ祝りて曰

く、「吾若し二千石を得ば、斧當に此の處に着くべし」と。因りて之を擲つに、欲する所の一丈八尺の處に中たる。後果して郡と爲る。

【訳文】 文翁はかつて大樹を切ろうとした。切ろうとしたところは地面から一丈八尺(約四尺)だった。文翁は神に告げて、「私がもし太守となることができれば、斧はその場所につき刺さるはずである」と言った。そこで斧を投げたら、切ろうとした一丈八尺のところになたつた。後に果して郡の太守となつた。

【補説】 文翁の靈異譚は、『御覽』卷七四引『録異傳』にも見られる。

文翁者、廬江人。爲兒童時、乃有神異。及長、當起歷下陂以作田、文翁盡日斫伐柴薪、以爲陂塘。其夜、忽有數百頭野豬、以鼻一載土着柴中、比曉成塘。(『古小説鈎沈』所収『録異傳』第18話へ「鼻」無「一」字。)

文翁は、廬江の人なり。兒童たりし時、乃ち神異有り。長ずるに及び、歴下の陂を起こし以て田を作るに當たり、文翁 盡日柴薪を斫伐し、以て陂塘を爲る。其の夜、忽ち數百頭の野猪有り、鼻を以て一たび土を載せて柴中に着け、曉に比び塘を成す。

『廣記』卷一三七（「徵應三」）引殷芸『小説』には、『幽明録』と『録異傳』の二話を併せて収録している。

漢文翁當起田、斫柴爲陂。夜有百十野猪、鼻戴土、著柴中。比曉、塘成、稻常收。嘗欲斷一大樹。欲斷處去地一丈八尺。翁先呪曰、「吾得二千石、斧當著此處。」因擲之、正斫所欲。後果爲蜀郡守。（『古小説鉤沈』所收殷芸『小説』第47話）

漢の文翁 田を起こすに當たり、柴を斫りて陂を爲る。夜 百十の野猪有り、鼻もて土を戴き、柴中に著く。曉に比び、塘成り、稻常に收む。嘗て一大樹を斷たんと欲す。斷たんと欲する處は地を去ること一丈八尺なり。翁先づ呪りて曰く、「吾 二千石を得ば、斧 當に此の處に著くべし」と。因りて之を擲つに、正に欲する所を斫る。後果して蜀郡の守と爲る。

斧を投げて占う話としては、『御覽』卷七六三引『七賢傳』に、

文黨、字翁仲、與人俱入山取木、謂侶人曰、「吾欲遠學。先試投斧高木上、斧當挂。」乃投之、斧果上。

因之長安受經。（文黨、字は翁仲、人と俱に山に入り木を取るに、侶人に謂ひて曰く、「吾 遠く學ばんと欲す。先づ試みに斧を高木の上に投ずるに、斧 當に挂るべし」と。乃ち之を投ずるに、斧果して上る。因りて長安に之き經を受く。）
 というのがある。

35 長安有張氏者。晝獨處室、有鳩自入、止於對牀①。張惡之、披懷祝曰、「鳩、爾來爲我禍耶、止承塵。爲我福耶、入我懷。」鳩翻飛入懷。以手探之、不知所在、而得一金帶鉤焉②。遂寶之③。自是之後④、子孫昌盛⑤。
 〔初學記二十七。御覽八百十一。事類賦注九〕※鄭晚晴輯注本三八頁

【校異】 ①「於對牀」、初學記作「于對牀」、御覽作「于對床」、鮑崇城本作「于牀」。②事類賦注無「一」字。③「之」、初學記作「焉」。④事類賦注無「之後」二字。⑤「昌盛」、事類賦注作「盛昌」。

【注釈】 對牀 向かいの寝台。『世説新語』假譎篇に「江彭暝入宿、恒在對牀上。」（江彭 暝れて入り宿るに、恒に對牀の上に在り）と、江彭が諸葛恢の娘の寢室で眠る時のことを記している。披懷 懷を開く。『文選』卷二〇潘岳「投分寄石友」李善注引阮瑀「爲魏武與劉備書」に「披懷解帶、投分託意。」（懷を披き帯を解き、分を投じて意を記す）、卷五三陸機「辨亡論」下に「披

懐虚己、以納諫士之算。」（懐を抜き己を虚しくして、以て諫士の算を納る）とあり、相手に対して誠意を示す意を表す。承塵 床の上に張った塵よけの幕。『釋名』釋牀帳に「承塵、施於上、承塵土也。」（承塵は、上に施し、塵土を承くるなり）という。帶鉤 帶留めの金具。『史記』齊太公世家に「射中小白帶鉤。」（射て小白の帶鉤に中つ）とある。

【訓読】 長安に張氏なる者有り。晝獨り室に處るに、鳩有り自ら入り、對牀に止まる。張之を惡むも、懐を抜きて祝りて曰く、「鳩よ、爾の來るを我が禍と爲すや、承塵に止まれ。我が福と爲すや、我が懐に入れ」と。鳩翻飛して懐に入る。手を以て之を探るも、在る所を知らずして、一の金の帶鉤を得。遂に之を寶とす。是れよりの後、子孫昌盛す。

【訳文】 長安に張氏という人がいた。昼間にひとり部屋にいと、鳩がやって来て、向かいの寝台に止まった。張氏はこれを嫌がったが、胸元を開いて告げて言った、「鳩よ、お前が来たのが私の災いとなるのなら、塵受けの幕の上に止まりなさい。私の幸福となるのなら、私の懐に入りなさい」と。鳩は飛んで来て懐に入った。手で探ったが、鳩はどこにいったかわからず、かわりに一個の金の帶留めの金具を得た。そこでそれを宝とした。これから後、子孫が繁栄した。

【補説】 この話は、『搜神記』卷九「張氏鉤」（第240

話）

にも見られる。

京兆長安、有張氏。獨處一室。有鳩自外入、止於牀。張氏祝曰、「鳩來。爲我禍也、飛上承塵。爲我福也、即入我懷。」鳩飛入懷。以手探之、則不知鳩之所在、而得一金鉤。遂寶之。自是子孫漸富、資財萬倍。蜀賈至長安、聞之、乃厚賂婢。婢竊鉤與賈。張氏既失鉤、漸漸衰耗。而蜀賈亦數罹窮厄、不爲己利。或告之曰、「天命也。不可力求。」於是賈鉤以反張氏、張氏復昌。故關西稱張氏傳鉤云。（京兆長安に、張氏有り。獨り一室に處る。鳩有り外より入り、牀に止まる。張氏祝りて曰く、「鳩よ來れ。我が爲に禍せんとするや、飛びて承塵に上れ。我が爲に福せんとするや、即ち我が懐に入れ」と。鳩飛びて懐に入る。手を以て之を探れば、則ち鳩の在る所を知らずして、一の金鉤を得。遂に之を寶とす。是れより子孫漸く富み、資財萬倍す。蜀の賈長安に至り、之を聞き、乃ち厚く婢に賂す。婢鉤を竊み賈に與ふ。張氏既に鉤を失ひ、漸漸として衰耗す。而して蜀の賈も亦數しば窮厄に罹り、己が利と爲さず。或ひと之に告げて曰く、「天命なり。力めて求むべからず」と。是に於いて鉤を賣らし以て張氏に反し、張氏復た昌んなり。故に關西張氏の傳鉤と稱すと云ふ。）

『幽明録』には記載されていない後半部によると、張

氏にしか効き目がない帯留めだったことがわかる。この他、『搜神記』巻九には、次の第36話も含めてその家に吉祥をもたらす致富譚がいくつかある。

『御覽』巻三七八引『三輔決録注』（後漢・趙岐撰、晉・摯虞注）に、次の第36話と併せて、

張氏得鉤、何氏得筭。故三輔舊語曰、「何氏筭、張氏鉤。何氏肥、張氏瘦。」言何氏有肥人輒貴、瘦人輒賤。張氏瘦者輒貴、肥者輒賤。故二族以鉤筭知吉凶、以肥瘦知貴賤。（張氏鉤を得、何氏筭を得。故に三輔の舊語に曰く、「何氏の筭、張氏の鉤。何氏肥え、張氏瘦す」と。言ふ、何氏に肥人有れば輒ち貴く、瘦人なれば輒ち賤し。張氏の瘦する者は輒ち貴く、肥ゆる者は輒ち賤しと。故に二族は鉤筭を以て吉凶を知り、肥瘦を以て貴賤を知る。）

と記されているので、漢代から伝承されていた話と思われる。『廣記』巻二九一（「神一」）「何比干」（出『三輔決録』）の末にも「與張氏俱授靈瑞、累世爲名族。三輔舊語曰、『何氏策、張氏鉤也。』」と記す。

なお、『法苑珠林』巻五六（大藏經本。四部本巻七〇）には、出処を記さず、

晉長安有張氏者。晝獨處室。有鳩自外入、止于床。張氏惡之。披懷而祝曰、「鳩、爾來爲我禍耶、飛上承塵。爲我福耶、來入我懷。」鳩翻飛入懷。乃化爲一鉤。從爾資産巨萬。

と、『搜神記』と『幽明録』の両者を併せたような文章で、鳩が帯留めに變化したと記していて、これもまた一系の伝承話と思われる。

36 漢何比干夢有貴客①、車騎滿門。覺以語妻子②、未已、門首有老姥、年可八十餘、求避雨。雨甚盛而衣不沾濡③。比干延入、禮待之。乃曰、「君先出自后稷、佐堯、至晉有陰功④。今天賜君策。」如簡、長九寸、凡九百九十枚、以授之曰、「子孫能佩者富貴。」言訖出門、不復見。（廣記一百三十七。新編分門古今類事十五）※鄭晚晴輯注本三五頁

【校異】 ①「漢何比干」、新編分門古今類事（十萬卷樓叢書本）作「何比干漢人也」。②校記云、「古今類事」十五亦引作其家人」。③「古今類事」無「盛」「沾」字。④「古今類事」無「至晉」二字。

【注釈】 何比干 生没年未詳。『尚書』を朝錯に学び、漢武帝の時、廷尉正となり、張湯が法を厳しく執行したのに対して仁恕に務め、張湯としばしば争い、救われた者は千人にも達した。後に丹陽都尉となり、汝陰（今の安徽省阜陽市）から扶風の平陵（今の陝西省咸陽市の西北）に居を移し、代々名族となる。『後漢書』巻四三何敞傳に見える。后稷 名は弃、別姓は姬氏。堯の時、農政を担当し、周の始祖となる。『史記』巻四周本紀に見える。至晉有陰功 晋の時代に隠れた功績があった。

晋は周の武王の子、成王の弟唐叔虞が晋侯となったことより始まる。陰功は隠れた功績、陰行と同義。陰行は『淮南子』人間訓に「夫有陰德者、必有陽報。有陰行者、必有昭名。」（夫れ陰徳有る者は、必ず陽報有り。陰行有る者は、必ず昭名有り）とある。『搜神記』卷九は「陰徳」に作る。『通志』氏族略に、何氏は晋の唐叔虞の子孫の韓氏に始まり、韓が秦に滅ぼされて子孫が江淮に分散し韓の音が何に変わって何氏となったという。

策 命令書。王命を簡策（竹簡を綴じ合わせたもの）に書き記したものの。『周禮』春官内史「策命之」鄭玄注に「策、謂以簡策書王命。」（策は、簡策を以て王命を書くを謂ふ）、『春秋左氏傳』昭公三年「授之以策」杜預注に「策、賜命之書。」（策は、命を賜ふの書）という。

子孫能佩者富貴 この一文だけなら、子孫でこれを身につけることができる者は富貴になるでしょうということであるが、前文との意味が通じにくい。『搜神記』卷九は、「子孫佩印綬者、當如此算。」（子孫の印綬を佩ぶる者は、當に此の算の如くなるべし）に作る。これなら、子孫で高官の位につく者は九百九十枚の竹簡の数ほど多くに達するでしょうという意味になり、前文と通じる。

【訓読】 漢の何比干夢に貴客有り、車騎門に滿つ。覺めて以て妻子に語り、未だ已まざるに、門首に老姥有り、年八十餘可り、雨を避けんことを求む。雨甚だ盛んなるに衣沾濡せず。比干延き入れ、之を禮待す。乃ち

曰く、「君の先は后稷より出で、堯を佐け、晉に至りて陰功有り。今天君に策を賜ふ」と。簡の如くして、長九寸、凡そ九百九十枚、以て之に授けて之曰く、「子孫能く佩ぶる者は富貴ならん」と。言ひ訖りて門を出で、復た見えず。

【訳文】 漢の何比干は夢に高貴な客人が有り、車や馬が門に満ちあふれた夢を見た。醒めてから妻子に話したが、まだ語り終わらないうちに、門に八十歳歳の老婆が立ち、雨宿りをさせてくれといった。雨が激しく降っていたのに衣服が濡れていなかった。比干は招き入れて、手厚くもてなした。そこで老婆は、「あなたの先祖は后稷から始まり、堯を補佐し、晋になって隠れた功績がありました。今、天帝があなたに勅命を下されました」と言った。その勅命書は竹ふだのようで、長さ九寸（約二十二センチ）のものが、全部で九百九十枚あり、それを比干に授けて、「子孫でこれに身につけることができる者は富貴になるでしょう」と言った。言い終わると門を出で、姿が見えなくなった。

【補説】 この話は、『搜神記』卷九「何比干」（第241話）にも見られ、

漢征和三年三月、天大雨。何比干在家、日中、夢貴客車騎滿門。覺以語妻。語未已、而門有老嫗、可八十餘、頭白。求寄避雨。雨甚而衣不沾漬。雨止、送至門。乃謂比干曰、「公有陰德。今天錫君策、以廣

公之子孫。」因出懷中符策。狀如簡、長九寸、凡九百九十枚、以授比干曰、「子孫佩印綬者、當如此算。」（漢の征和三年三月、天大いに雨ふる。何比干家に在り、日中、夢に貴客の車騎門に滿つ。覺めて以て妻に語る。語未だ已まずして、門に老嫗有り、八十餘可りにして、頭白く、寄りて雨を避けんことを求む。雨甚しきも衣沾漬せず。雨止み、送りて門に至る。乃ち比干に謂ひて曰く、「公陰德有り。今天君に策を錫ひ、以て公の子孫を廣めんとす」と。因りて懷中の符策を出だす。狀は簡の如くして、長九寸、凡そ九百九十枚、以て比干に授けて曰く、「子孫の印綬を佩ぶる者は、當に此の算の如くなるべし」と。）

と、『幽明録』よりは整った文章になっている。『後漢書』卷四三何敞傳注引『何氏家傳』に引くこの話も、六世祖父比干、字少卿、經明行修、兼通法律。爲汝陰縣獄吏決曹掾、平活數千人。後爲丹陽都尉、獄無冤囚、淮汝號曰、「何公」。征和三年三月辛亥、天大陰雨。比干在家、日中、夢貴客車騎滿門。覺以語妻。語未已、而門有老嫗、可八十餘、頭白、求寄避雨。雨甚而衣履不霑漬。雨止、送至門。乃謂比干曰、「公有陰德。今天錫君策、以廣公之子孫。」因出懷中符策、狀如簡、長九寸、凡九百九十枚、以授比干、子孫佩印綬者、當如此算。比干年五十八、有六男、

又生三子。本始元年、自汝陰徙平陵、代爲名族。と、『搜神記』とほぼ同文である。

また、『御覽』卷四七〇引何法盛『晉中興書』に、何比干、字長卿。武帝時、爲丹陽都尉、有陰德。嘗獨坐、天大雨。有一老母、詣比干、而衣不濡。比干怪而敬焉。臨去、懷中出金冊九百九十枚、以授比干曰、「尔子孫當佩印綬、如此冊數。」と、『廣記』卷二九一（「神一」）「何比干」（出『三輔決録』）に、

汝南何比干、通律法。元朔中、公孫洪辟爲廷尉右平。獄無冤民、號曰、「何公」。征和初、去官在家。天大陰雨。晝寢、夢有客車騎。覺而一老嫗年八十餘、頭盡白、求寄避雨。雨方甚、而嫗衣履不濡。比干異之、延入座。須臾雨止。嫗辭去。出送至門。跪謂比干曰、「君先出自后稷、堯至晉有陰德、及公之身。當繼公一人。今天賜策、以廣公子孫。佩印綬者、當隨簡。」長九寸、凡百九十板、以授比干曰、「子孫佩印綬者、當隨此算。」嫗東行、忽不見。比干年五十八、有六男。後三歲、復生三男。徙平陵、八男去、一子留。常祭嫗如東行。及終、遺令東首。自比干已下、與張氏俱授靈瑞、累世爲名族。三輔舊語曰、「何氏策、張氏鈞也。」と記す。『三輔決録』の記事については、前の第35話の「補説」を参照。

37 漢建武元年、東萊人姓也、家嘗作酒盧①。入内政見三奇客②。共持麪飯至、抒其酒飲③。異以飯麪代處④。而三鬼相與醉于林中⑤。〔書鈔一百四十八〕※鄭晚晴輯注本一三頁

【校異】 ①清・高士奇輯補『編珠』（四庫全書本）卷三引『幽明錄』無「盧」字。②「入内政」、「編珠」卷三引作「一日」。③『編珠』卷三引「抒」作「索」、無「其」字。④此句、『編珠』卷三引作「飲竟而去頃有人來云見」十字。⑤『編珠』卷三引無「而」字、「相與醉于」作「酣醉於」三字。

【注釈】 漢建武元年 二五年。建武は、後漢の光武帝の年号（二五—五六年）。東萊 郡名。今の山東省蓬萊市を中心とした地域。姓也 姓は也（ハ、mie）。『搜神記』卷一六は「姓池」に作る。作酒盧 酒屋を開く。酒盧は酒壺と同じ。『世說新語』傷逝篇に「經黃公酒壺下過。」（黃公の酒壺の下を經て過ぐ）とある。

政見 ちようと見かける。政と正は同じ。麪飯 酒を醸す麪。抒其酒飲 店の酒を汲んで飲む。抒は汲む意。鄭晚晴注は「昏」（汲む意）とする。異以飯麪代處 怪しんで麪を別の所に移したという意か。鄭晚晴注に「異」の下に脱文があるというように意味不明の句。『搜神記』にはこの句はない。

【訓読】 漢の建武元年、東萊の人姓は也、家嘗て酒

盧を作す。内に入るに政に三奇客を見る。共に麪飯を持ちて至り、其の酒を抒みて飲む。異しみて飯麪を以て處を代ふ。而して三鬼相與に林中に醉ふ。

【訳文】 漢の建武元年、東萊郡の也という人が、家である時酒屋を開いた。中に入ってみると三人の不思議な客がいるのを見た。皆麪を持ってきて、店の酒を汲んで飲んでいた。怪しんで麪を別の所に移した。そうしたところ三人の幽鬼が林の中で酔っぱらっていた。

【補説】 『幽明錄』のこの話は、後半部に脱文があるように、文意が不明であるが、同じ話を収録する『搜神記』卷一六「鬼酣醉」（第391話）では、次のように作る。

漢建武元年（原本作「漢武建元年」、據汪紹楹校注改。）、東萊人、姓池、家常作酒。一日見三奇客、共持麪飯至、索其酒飲。飲竟而去。頃之、有人來云、「見三鬼酣醉於林中。」（漢の建武元年、東萊の人、姓は池、家常に酒を作る。一日三奇客を見るに、共に麪飯を持ちて至り、其の酒を索めて飲む。飲み竟りて去る。之を頃くして、人有り來りて云ふ、「三鬼の林中に酣醉するを見る」と。）

これだと麪や飯を持ってきて酒を買って飲んだ三人の客人が幽鬼だったということがよくわかる。

なお、『幽明錄』第25話にも東萊の人の酒造りの話があり、東萊郡に酒にまつわる一群の話が伝承されていたと思われる。

38 漢明帝①永平五年②、剡縣劉晨③・阮肇共入天台山取穀皮④、迷不得返⑤。經十三日⑥、糧食乏盡⑦、飢餓殆死⑧。遙望山上有一桃樹⑨、大有子實。而絕巖邃澗⑩、永無登路⑪。攀緣藤葛⑫、乃得至上⑬。各噉數枚⑭、而飢止體充⑮。復下山⑯、持杯取水⑰、欲盥漱⑱、見蕪菁葉從山腹流出。甚鮮新。復一杯流出、有胡麻飯糝⑲。相謂曰、「此必去人徑不遠⑳。」便共沒水㉑、逆流行二三里㉒、得度山出一大溪㉓。

溪邊有二女子㉔、姿質妙絕㉕。見二人持杯出、便笑曰、「劉・阮二郎、捉向所失流杯來。」晨・肇既不識之、緣二女便呼其姓㉖、如似有舊、乃相見忻喜。問㉗、「來何晚耶㉘。」因邀還家㉙。

其家銅㉚瓦屋㉛、南壁及東壁下各有一大牀㉜。皆施絳羅帳㉝、帳角懸鈴、金銀交錯㉞。牀頭各有十侍婢㉟。敕云㊱、「劉・阮二郎、經涉山岨㊲、向雖得瓊實、猶尚虛弊。可速作食。」食胡麻飯㊳、山羊脯、牛肉㊴。甚甘美㊵。食畢行酒。有一羣女來㊶。各持五三桃子㊷、笑而言、「賀汝婿來㊸。」酒酣作樂。劉・阮忻怖交并㊹。至暮、令各就一帳宿。女往就之、言聲清婉、令人忘憂。

至十日後㊺、欲求還去。女云、「君已來是、宿福所牽。何復欲還耶㊻。」遂停半年㊼。氣候草木是春時㊽、百鳥啼鳴㊾、更懷悲思㊿。求歸甚苦㊽。女曰㊿、「罪牽君。當可如何㊽。」遂呼前來女子㊽、有三四十人。集會奏樂、

共送劉・阮、指示還路。

既出、親舊零落、邑屋改異㊽、無復相識㊿。問訊得七世孫㊽。傳聞上世入山㊽、迷不得歸。至晉太元八年㊽、忽復去、不知何所。〔珠林（大藏經本）三十一、（四部本）四十一。類聚七。白氏六帖事類集二（白孔六帖五）。御覽四十一、九百六十七。事類賦注二十六〕※鄭晚晴輯注本一頁

【校異】①「漢明帝」、校記云、「二字依『類聚』『御覽』引補。」魯迅以珠林爲底本。六帖・御覽四一作「漢明帝」、類聚作「漢帝」二字、珠林作「漢」一字、他皆無此三字。②御覽九六七・事類賦注無此四字。③事類賦注無「剡縣」二字。「晨」、校記云、「『御覽』九百六十七引作晨、注云、音成。」④事類賦注無「山」字。類聚・珠林・六帖・事類賦注無「取穀皮」三字、校記云、「三字『御覽』引有。」「穀」、底本作「穀」、御覽四一作「穀」、鮑崇城本四一・九六七並作「穀」、今據御覽九六七改。集韻云、「穀、或从米。」穀・穀・穀・穀同、穀、別字。⑤類聚・六帖無此句以下一百五字。⑥事類賦注無此句。御覽九六七無「經」字。「三」、御覽四一作「餘」。⑦珠林無「食」字。「糧」、御覽四一（鮑崇城本同）・九六七作「糧」。⑧事類賦注無此句。「飢」、四部本珠林作「餓」。⑨「餒」、大藏經本珠林・御覽九六七（鮑崇城本同）作「餒」。⑩御覽九六七（鮑崇城本同）無「遙」「樹」二字。事類賦注此句以下三十八字作「得山上數桃啖之遂

不飢」。⑩珠林無「而絕巖邃澗」五字。校記云、「五字依『御覽』引補。」⑪「永」、御覽四一（鮑崇城本同）作「了」、鮑崇城本九六七作「求」。⑫「攀」、御覽九六七（鮑崇城本同）作「扳」、注云、「音班」、「緣」、底本作「援」、珠林·御覽九六七（鮑崇城本同）竝作「緣」、今據改。此句、御覽四一作「攀葛」二字、鮑崇城本四一作「攀葛捫蘿」。⑬御覽四一（鮑崇城本同）無「上」字。御覽九六七（鮑崇城本同）作「然後得上」。⑭御覽四一（鮑崇城本同）無「各」字。御覽九六七（鮑崇城本同）作「各啖數桃」。⑮「飢」、四部本珠林作「饑」。此句、御覽九六七（鮑崇城本同）作「而不飢」三字。⑯御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無「復」字。⑰御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無此句以下五十二字。⑱「漱」、珠林作「嗽」。⑲御覽四一（鮑崇城本同）無「飯」字。⑳「必」、底本·鮑崇城本四一作「知」。今據御覽四一改。珠林無「相謂此必去人徑不遠」十字。校記云、「二句依『御覽』引補。」㉑御覽四一（鮑崇城本同）無此以下二句。㉒底本無「行」字、今據珠林補。㉓類聚·六帖·御覽四一（鮑崇城本同）無「得」字。御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無「得度山出」四字。㉔珠林·六帖無「溪」字。御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無「溪」「子」字。㉕「姿質」、六帖作「姿容」、鮑崇城本四一·御覽九六七（鮑崇城本同）作「資質」、「妙絕」、白孔六帖作「絕妙」。㉖御覽四一「二」下有「女」字。

鮑崇城本四一「人」下有「女」字。「杯」、御覽四一（鮑崇城本同）作「盃」。類聚·六帖無此句以下無二百九十六字。御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無此句以下四十七字。㉗大藏經本珠林·御覽四一（鮑崇城本同）無「緣」字。㉘大藏經本珠林作「相見而悉問」、四部本珠林作「乃相見而悉問」、御覽四一（鮑崇城本同）作「相見忻喜問」。校記云、「珠林引作而悉、今從『御覽』」。㉙「耶」、底本作「邪」、今據御覽四一（鮑崇城本同）改。珠林無此字。㉚「邀」、大藏經本珠林·御覽四一（鮑崇城本同）·御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注作「要」。㉛「其家」、大藏經本珠林作「皆」、御覽四一（鮑崇城本同）無此二字。「銅」、御覽四一（鮑崇城本同）作「筒」、校記云、「『御覽』引作筒」。㉜御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無此句以下三十六字。㉝「牀」、大藏經本珠林作「床」。㉞御覽四一（鮑崇城本同）無「帳」字。㉟「金」上、御覽四一（鮑崇城本同）有「上」字。㊱「牀」、大藏經本珠林作「床」。御覽四一（鮑崇城本同）無「有」字。㊲「救」上、御覽四一（鮑崇城本同）有「便」字。「救」、大藏經本珠林·鮑崇城本九六七作「勅」、四部本珠林·御覽四一（鮑崇城本同）·九六七·事類賦注作「勅」。「救」下、御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注有「婢」字。㊳「阻」、御覽四一（鮑崇城本同）作「阻」。御覽九六七（鮑崇城本同）·事類賦注無此句。㊴「食」、御覽四一（鮑崇城本同）作「

有。「飯」、鮑崇城本四一作「餅」。御覽九六七（鮑崇城本同）無此句以下八十六字。④御覽四一（鮑崇城本同）無「牛肉」二字。④御覽四一（鮑崇城本同）無「甘」字。④御覽四一（鮑崇城本同）無「一」字。④「五三」、御覽四一（鮑崇城本同）作「三五」。④「婿」、大藏經本珠林作「婿」。④珠林無此句。校記云、「御覽」引有此句。④底本無「至」字、今據御覽四一（鮑崇城本同）補。珠林無此句以下二十二字。④「耶」、底本作「邪」、今據御覽四一（鮑崇城本同）改。校記云、「至十日後至此已上竝依『御覽』引補。」④「停」、類聚・六帖・御覽四一（鮑崇城本同）作「留」。④類聚・六帖・御覽九六七（鮑崇城本同）・事類賦注無此句以下十一字。④「啼鳴」、御覽四一（鮑崇城本同）作「嗚呼」。④類聚與下句合作「懷土思求歸」五字、六帖作「懷土思鄉求歸」六字、御覽九六七（鮑崇城本同）作「懷土思歸」四字。御覽四一（鮑崇城本同）作「更懷土」三字。事類賦注作「懷土而思」。④類聚・六帖・御覽九六七（鮑崇城本同）無此句。此句以下、事類賦注不引。④類聚・六帖無此句以下三十二字。④御覽九六七（鮑崇城本同）無「當可」二字。御覽四一（鮑崇城本同）作「當如何」三字。④以下六十六字、御覽九六七作「便語大路」四字、鮑崇城本九六七作「便語以大路」五字。④「改異」、六帖作「更變」。④「改」、御覽四一（鮑崇城本同）作「全」。④四部本珠林無「復」字。④「問訊」、類聚・六帖作「訊問」、

御覽四一（鮑崇城本同）無「訊」字。④此句以下、類聚・六帖不引。④此句以下、御覽四一（鮑崇城本同）不引。【注釈】漢明帝永平五年 西曆六二年。明帝は後漢の第二代皇帝、在位五八―七五年。剡縣 会稽郡の県。今の浙江省嵊州市。劉晨・阮肇 この話に出てくるだけの人物。「御覽」卷九六七（鮑崇城本同）は劉晨を劉晨に作る。天台山 浙江省天台県の北にある山。孫綽「遊天台山賦」（『文選』卷一一）に「靈仙之所窟宅」（靈仙の窟宅する所）とあるように、古来、仙山と称され多くの仙人を志す道士が集まっていた。穀皮 こうその樹皮。『説文』に「穀、楮也。」という。『後漢書』卷八三逸民・周黨傳「乃著短布單衣、穀皮綳頭、待見尚書。」注に「以穀樹皮爲綳頭也。」（穀樹皮を以て綳頭と爲すなり）。『南史』卷四九劉訐傳に「訐嘗著穀皮巾、披納衣、每遊山澤、輒留連忘返。」（訐嘗て穀皮巾を著け、納衣を披て、山澤に遊ぶ毎に、輒ち留連して返るを忘る）、『梁書』卷五一處士・張孝秀傳に「不好浮華、常冠穀皮巾。」（浮華を好まず、常に穀皮巾を冠す）とあるように、隱者がこうその皮で頭巾を作り、穀皮巾と称していた。原文を「穀」として、『蒙求』（卷中）「劉阮天台」に『續齊諧記』を引いて、「取穀皮」を「採桑」二字に作るころから、「穀皮」を葉草の一種とする説があるが、これは「穀」と「穀」を混同したことによるものである。鄭晚晴注、『中国古代十大志怪小説賞析』、

李劍國『唐前志怪小説輯釋』ともに「穀」字を是とする。
絶巖邃澗 切りたつた岩と深い谷。晉・劉琨「扶風歌」
 (『文選』卷二八)に「攬轡命徒侶、吟嘯絶巖中」(轡を攬ること徒侶に命じ、絶巖中に吟嘯す)、晉・湛方生「懷春賦」(『類聚』卷三引)に「幽澗泮冰而流清」(幽澗氷を泮かして流れ清し)とある。永無登路 全く登る道がない。「永無」は、全くないの意。曹植「求通親親表」(『文選』卷三七)に「今臣以一切之制、永無朝覲之望。」(今臣一切の制を以て、永く朝覲の望無し)とある。**攀縁藤葛** 藤や葛のつるを引つ張りながら上る。「攀縁」はあるものを引つ張つて上る意、『三国志』卷五七呉書吾粲傳に「其大船尚存者、水中生人皆攀縁して號呼す」とある。「攀援」と同じ。**盪激手** を洗ひ口をすすぐ。『禮記』内則「雞初鳴、盪激。」(雞初めて鳴いて、盪盪激す)とある。**蕪菁** 野菜の名、かぶら。『後漢書』卷七桓帝紀に「其令所傷郡國種蕪菁以助人食。」(其れ傷るる所の郡國をして蕪菁を種えて以て人食を助けしめよ)とある。**胡麻飯糝** ごま飯の粒。胡麻は神仙家に「巨勝」と称され、不老の薬と考えられていた。『抱朴子』仙藥篇に「巨勝一名胡麻、餌服之不老。」(巨勝一名は胡麻、之を餌服すれば老いず)とあるように、桃とともに神仙世界を表す言葉。糝は飯粒。**劉・阮二郎** 劉さんと阮さんの意。郎は男子の呼

び名に添えることば。江藍生『魏晉南北朝小説詞語匯釋』に「六朝人称主人爲郎、郎君。」というように、六朝時代は主人の尊称として用いられる。**山岵** 険しい山。岵は険しい意で阻と同じ。**瓊實** 仙果の別称。ここでは桃をさす。後の梁・沈約「繡像贊」(『廣弘明集』卷一六引)に「水耀金沙、樹羅瓊實。」(水は金沙に耀き、樹は瓊實を羅ぬ)とある。**虚弊** 虚弱疲弊、疲れきっている意。**行酒** 酒を酌んで勤める。『史記』魏其武安侯列傳に「灌夫不悅。起行酒、至武安。」(灌夫悦ばず。起ちて酒を行らし、武安に至る)とある。**五三桃子** 数個の桃。「五三」は数個(三〇五)という意。『漢語大詞典』に「约計数目之詞。犹言三五。」という。**御覽** 卷四一は「三五」に作るが、意味は同じ。言**聲清婉** 声がきよらかで美しい。清婉は、『裴子語林』(『御覽』卷六四四引、『古小説鈎沈』本第25話)に「嵇中散夜彈琴、忽有一鬼著械來、歎其手快曰、『君一絃不調。』中散與琴調之、聲更清婉。」(嵇中散夜琴を弾するに、忽ち一鬼の械を著けて來たる有り、其の手の快なるを歎じて曰く、「君の一絃調はず」と。中散琴を與へ之を調はしむるに、聲更に清婉たり。)、『世說新語』賞譽篇に「許掾嘗詣簡文。爾夜風恬月朗、乃共作曲室中語。襟情之詠、偏是許之所長。辭寄清婉、有逾平日。」(許掾嘗て簡文に詣る。爾の夜風恬かにして月朗るく、乃ち共に曲室中の語を作す。襟情の詠は、偏に是れ許

の長ずる所なり。辭寄清婉なること、平日に逾ゆる有り。とある。『十大志怪小説賞析』では「女子説話的声音清脆婉轉」と訳す。宿福所牽 前世からの福德に導かれてこの世界にやつて来た。宿福は前世で定められた福の意で、『法華經』化城喩品に「我等宿福慶、今得値世尊。」（我等 宿福の慶ありて、今世尊に値ふを得たり。）、鮑照「侍郎報滿辭閭疏」に「宿福餘慶、爰遊聖明。」（宿福の餘慶ありて、爰に聖明に遊ふ。）とある。下文の「罪牽君」とともに仏教の影響が見られる。求歸甚苦 帰りたいことを切々と訴える。苦は程度の甚だしいこと、切々たる状態を言う。『世説新語』規箴篇に「執經登坐、諷誦朗暢、詞色甚苦。」（經を執り坐に登り、諷誦朗暢、詞色甚だ苦りなり。）とある。罪牽君 俗世の罪業があなたたちを引き寄せている。罪は罪業の意で、『法華經』化城喩品に「罪業因縁故、失樂及樂想。」（罪業の因縁の故に、樂及び樂想を失ふ。）とある。劉義慶『宣驗記』（『古小説鉤沈』本第24話）に、夢に鷲鳥が銜えてきた一巻の書を見ると「罪福の事」が書かれていて、明朝起きて見るとそれは仏典だったという話がある。晉太元八年 三三三年、東晉の孝武帝の時。山に入った後漢明帝永平五年から、三二一年が経過していたことになる。

【訓読】 漢の明帝の永平五年、劍縣の劉晨・阮肇共に天台山に入りて穀皮を取り、迷ひて返るを得ず。十三

日を経て、糧食乏盡し、飢餓して殆ど死せんとす。遙かに山上を望むに一桃樹有りて、大いに子實有り。而るに絶巖邃澗ありて、永く登路無し。藤葛を攀縁して、乃ち上に至るを得たり。各おの數枚を噉ひて、飢ゑ止み體充つ。復た山を下り、杯を持ちて水を取り、盥漱せんと欲するに、蕪菁の葉の山腹より流出するを見る。甚だ鮮新なり。復た一の杯流出し、胡麻飯の糝有り。相謂ひて曰く、「此れ必ず人徑を去ること遠からず」と。便ち共に水に没し、流れに逆ひて行くこと二三里にして、山を度りて一大溪に出づるを得たり。

溪邊に二女子有りて、姿質妙絶なり。二人の杯を持ちて出づるを見て、便ち笑ひて曰く、「劉・阮二郎、向に流れに失ひし所の杯を捉りて來たる」と。晨・肇既に之を識らざるも、二女の便ち其の姓を呼ぶや、舊有るに似たるが如きに縁りて、乃ち相見て忻喜す。問ふ、「來たること何ぞ晚きや」と。因りて邀へて家に還る。

其の家は銅の瓦屋にして、南壁及び東壁の下に各おの一大牀有り。皆絳き羅帳を施し、帳角に鈴を懸け、金銀交錯す。牀頭に各おの十侍婢有り。敎して云ふ、「劉・阮二郎、山岨を經涉し、向に瓊寶を得と雖も、猶尚ほ虚弊す。速やかに食を作るべし」と。胡麻の飯、山羊の脯、牛肉を食らふ。甚だ甘美なり。食畢はりて酒を行ふ。一羣の女の來たる有り。各おの五三の桃子を持ち、笑ひて言ふ、「汝の壻の來たるを賀す」と。酒酣にして樂を作

す。劉・阮忻怖交こも并なざる。暮に至りて、各おのを
して一帳に就きて宿せしむ。女も往きて之に就き、言聲
清婉にして、人をして憂うれひを忘れしむ。

十日の後に至り、還り去らんことを求めんと欲す。女
云ふ、「君の已に是に來たるは、宿福の牽く所なり。何
ぞ復た還らんと欲するや」と。遂に停まること半年なり。
氣候草木は是れ春時、百鳥啼鳴するも、更に悲思を懷き、
歸らんことを求むること甚だ苦くるりなり。女曰く、「罪君
を牽く。當に如何ともしすべけんや」と。遂に前に來たり
し女子を呼ぶに、三四十人有り。集まり會して樂を奏し、
共に劉・阮を送り、還る路を指示す。

既に出づるや、親舊零落し、邑屋改異して、復た相
識るもの無し。問訊して七世の孫を得たり。上世山に
入り、迷ひて歸るを得ずと傳へ聞くといふ。晉の太元八
年に至り、忽ち復た去り、何れの所なるかを知らず。

【訳文】 漢の明帝の永平五年、剡縣の劉晨・阮肇は連
れだつて天台山にこうその樹皮を取りに行き、道に迷つ
て帰ることができなくなつた。十三日も経つと、食糧が
尽きて、飢えて死にそうになつた。遙かに山頂を望み見
ると一本の桃の木があり、たくさんの実がなつていた。
しかし絶壁や深い谷があつて、まったく登る道がなかつ
た。藤や葛のつるをつたつてよじ登り、やっと頂上にた
どり着くことができた。それぞれ数個の桃を食べると、
飢えがおさまり元氣を回復した。山を下り、杯で水をく

み、手を洗い口をすすぐとすると、かぶの葉が山腹か
ら流れてくるのを見た。とても新鮮だつた。また一つの
杯が流れてきて、胡麻飯の粒がついていた。二人は、「
これは人の通う道まで遠くはないぞ」と言い、すぐに一
緒に川の中に入り、流れをさかのほつて二三里行くと、
山を越えて一つの大きな谷川に出ることができた。

谷川のほとりに二人の女がいて、その容姿はたぐいま
れな美しさだつた。二人が杯を持って川から出てきたの
を見ると、笑つて、「劉・阮さんのお二人が、さきほど
川に流してしまつた杯を持ってきてくださいましたよ。」
と言つた。劉晨・阮肇は彼女たちに見覚えはなかつたが、
二人の女が自分たちの名を呼んだので、昔なじみのよう
な気がして、顔を見合せて喜んだ。二人の女は、「ど
うしておいでになるのが遅かつたの」と尋ねながら、彼
らを自分たちの家に案内した。

その家は銅の瓦で葺いてあり、南と東の壁ぎわにそれ
それ大きな寝台が置いてあつた。どちらにも赤い薄絹の
帳がめぐらしてあり、帳のすみには鈴がかかり、金や銀
の飾りがちりばめられていた。それぞれの寝台の側には
十人の侍女がひかえていた。二人の女は侍女たちに、「
劉・阮さんのお二人は、険しい山を越えてこられ、さき
ほど桃を食べられました。まだお疲れです。すぐに食
事の用意を下さい」と命じた。胡麻飯や、山羊のほし
肉や、牛肉を食べた。とても美味しかった。食事が終わ

ると酒が振る舞われた。一群の女たちがやって来た。それぞれ数個の桃を持ち、笑いながら、「あなたたちのお婿さんが来られたのをお祝いします」と言った。酒宴が闌になると音楽が演奏された。劉・阮の二人は嬉しさと不安が入り交じった気持だった。日が暮れると、それぞれの寝台で休ませた。二人の女も寝台にやって来たが、その声は清らかで美しく、愛いを忘れさせるものだった。

十日が過ぎ、家に帰りたいと言った。すると女たちは、「あなた方がここに来られたのは、前世の福に導かれたのです。どうして帰ろうと思われるのですか」と言った。そのまま半年滞在した。気候や草木はいつも春で、さまざまな鳥がさえずっていたが、二人はいっそう故郷を思つて悲しみがつのり、帰りたいたいときりに訴えた。女たちは、「現世の罪業があなたたちを引き寄せているのですね。どうしようもありませんわ」と言った。そこで先にお祝いに来た女たちを呼ぶと、三四十人が来た。集まつて送別の会を開き音楽を演奏して、一緒に劉・阮を見送り、帰りの道を教えた。

故郷に帰つてみると、親戚や旧友は死に絶えて、村や家の様子は変わつていて、知り合いのものは誰もいなくなった。尋ね回つて七代目の孫を見つけ出した。孫は、先祖が山に入り、迷つて帰ることができなくなつたと伝え聞いていると言つた。二人は晋の太元八年になつて、ふと出かけたまま、何処へ行ったのかわからなくなった。

【補説】この話は、「桃花源記」の現実味を帯びた別世界とは対照的な神仙的別世界を記していて、唐代の小説『遊仙窟』（張鷟撰）の粉本とも言われ、後世の類話に与えた影響も大きい。『蒙求』には、「桃花源記」と並べて「武陵桃源・劉阮天台」と題して採録され、宋の『醉翁談録』・『緑窗新話』にもそれぞれ「劉阮遇仙女于天台山」「劉阮遇天台女仙」と題して収められ、元以後の雜劇でもこれを題材にしたものが見られる（李劍國『唐前志怪小説輯釋』に詳しい）。

天台山の神仙世界の特徴としては、

① 神仙世界の人は、人間界のことをよく知っている。
② 神仙世界は、気候がいつも春である。美味しい酒食に美しい女性がいる。

③ 時間の経過が違う。神仙世界の半年余りは、人間世界の三百年に相当する。

が挙げられる。これは、神仙世界が人間のおこがれの世界として創造されたものであることによる。つまり、神仙世界は人間界のことをすべて見通していて、いつも温暖な歓楽を尽くせ、年をとるのも遅いというのである。そもそも、この世に住みにくさを感じた人間は、もつと楽しい自分にとつて理想的な世界（理想郷）を夢想する。つまり「異郷へのおこがれ」である。『毛詩』魏風碩鼠に、「悪政に苦しむ人が「逝將去汝、適彼樂土。樂土、樂土、爰得我所。」（「逝きて將に汝を去り、彼の樂土に適

かんとす。楽土 楽土、爰（こゝ）に我が所を得ん」と、悪政のない楽土を求める詩があり、『老子』第八十章に「小国寡民」の理想郷を主張するのもそれであろう。また、『莊子』逍遙遊篇の「無何有之郷」、『列子』黄帝篇の「華胥氏国」がある。そして、秦の始皇帝や漢の武帝が求め続けた「不老不死」が、様々な長生術を生み、それを実現した神仙世界を創造するようになる。

ただこの『幽明録』の話は、単なる神仙の世界ではなく、仏教も参入している。それは、現世に生まれる前の福德に導かれ神仙の世界に入ることになった、罪業によって現世に引き寄せられているという天台二女の言葉「宿福所牽」「罪牽君」から考えられる（注釈参照）。また、劉・阮が山には入る時代を、中国に仏教が伝えられたと称される後漢の明帝の時に設定しているのも、その影響によるものであろう。

『廣記』巻六一（女仙六）は「天台二女」と題し、「出『神仙記』」（明鈔本作「出『搜神記』」）としてこの話を収録しているが、『神仙記』という書は不明である。汪紹楹校注『搜神記』では、佚文27（『廣記』の文と異なる所があるので、明鈔本に拠ったのかもしれない）に収める。点校本『廣記』（中華書局）の文は次のようである。

劉晨・阮肇入天台採藥、遠不得返。經十三日饑、遙望山上有桃樹子熟。遂躋險援葛至其下、噉數枚、

饑止體充。欲下山、以杯取水。見蕪菁菜流下、甚鮮妍。復有一杯流下、有胡麻飯焉。乃相謂曰、「此近人矣。」遂渡山、出一大溪。

溪邊有二女子、色甚美。見二人持盃、便笑曰、「劉・阮二郎、捉向杯來。」劉・阮驚。二女遂欣然如舊相識。曰、「來何晚耶。」因邀還家。

南東二壁、各有絳羅帳。帳角懸鈴、上有金銀交錯。各有數侍婢使令。其饌有胡麻飯、山羊脯、牛肉、甚美。食畢行酒、俄有群女持桃子、笑曰、「賀汝增來。」酒酣作樂。夜後各就一帳宿、婉態殊絕。

至十日、求還、苦留半年。氣候草木是春時、百鳥啼鳴。更懷鄉、歸思甚苦。女遂相送、指示還路。

鄉邑零落、已十世矣。

「漢明帝永平五年」「宿福」「罪」という仏教に関係すると思われる言葉はなく、最後の「晉太元八年」もない。或いはもともとこのような話があつて、『幽明録』のような文章になったのかもしれない。

『蒙求』が『續齊諧記』から引く話は、以下のようにある（『類林雜說』巻一五、『輿地紀勝』巻一二なども『續齊諧記』から引く）。

漢明帝永平中、剡縣有劉晨・阮肇。入天台山採藥、迷失道路、糧盡。望山頭有桃。共取食之、如覺少健。下山得澗水飲之、並澡洗。望見蔓菁菜葉、從山復出。次有一杯流出、中有胡麻飯屑。二人相謂曰、「去人

不遠。」因過水行一里、又度一山、出大溪。

見二女、顔容絶妙、世未有。便喚劉・阮姓名、如有舊。喜問、「郎等來何晚。」因邀過家。

廳館服飾精華、東西各有床。帳帷設七寶瓔珞、非世所有。左右直悉青衣端正、都無男子。須臾下胡麻飯、山羊脯。甚美。又設甘酒。有數十客、將三五桃至云、「來慶女婿。」各出樂器、歌調作樂。日向暮、仙女各還去。劉・阮就所邀女家止宿、行夫婦之道。

留十五日、求還。女曰、「來此、皆是宿福所招。得與仙女交接。流俗何所樂。」遂住半年。天氣和適、常如三二月、百鳥哀鳴。悲思求歸甚切。女曰、「罪根未滅、使君等如此。」更喚諸仙女、共作歌吹、送劉・阮。「從此山東洞口去、不遠至大道。」隨其言、果得還家鄉。

並無相識、鄉里怪異。乃驗得七代子孫。傳聞上祖入山不出、不知何在。既無親屬、栖泊無所。却欲還女家、尋山路不獲。至太康八年、失二人所在。

概ね『幽明録』と似ているが、「都無男子」「得與仙女交接。流俗何所樂。」の表現が加わり、やや仙女との交歓に重点が移ったような記述になっている。

また、同じ剡県の民の似た話が『搜神後記』巻一（第三話）にある（『御覽』巻四一引『續搜神記』）。

會稽剡縣民袁相・根頌二人獵、經深山重嶺甚多。見一羣山羊六七頭、逐之。經一石橋、甚狹而峻。羊去、

根等亦隨渡、向絶崕。崕正赤、壁立、名曰赤城。上有水流下、廣狹如匹布。剡人謂之瀑布。羊徑有山穴如門。豁然而過。既入、內甚平敞、草木皆香。有一小屋、二女子住其中。年皆十五六、容色甚美、著青衣。一名瑩珠、一名□□。見二人至、欣然云、「早望汝來。」遂爲室家。忽二女出行云、「復有得婿者、往慶之。」曳履於絶巖上行、琅琅然。二人思歸、潛去歸路。二女追還已知、乃謂曰、「自可去。」乃以一腕囊與根等、語曰、「慎勿開也。」於是乃歸。後出行、家人開視其囊。囊如蓮花、一重去、一重復、至五蓋、中有小青鳥、飛去。根還知此、悵然而已。後根於田中耕。家依常餉之、見在田中不動。就視、但有殼如蟬蛻也。（會稽の剡縣の民袁相・根頌の二人獵して、深山を經るに重嶺甚だ多し。一羣の山羊六七頭を見て、之を逐ふ。一石橋を經るに、甚だ狹くして峻し。羊去り、根等も亦隨ひて渡り、絶崕に向ふ。崕正に赤くして、壁立し、名づけて赤城と曰ふ。上に水流有りて下り、廣狹匹布の如し。剡人之を瀑布と謂ふ。羊徑に山穴有りて門の如し。豁然として過ぐ。既に入れば、内は甚だ平敞にして、草木皆香し。一小屋有りて、二女子其の中に住む。年皆十五六、容色甚だ美にして、青衣を著る。一の名は瑩珠、一の名は□□なり。二人の至るを見て、欣然として云ふ、「早に汝の來たるを望む」と。遂

に室家と爲る。忽ち二女 出で行かんとして云ふ、「復た婿を得たる者有り、往きて之を慶せん」と。履を絶巖上に曳きて行き、琅琅然たり。二人歸らんと思ひ、潜かに歸路に去る。二女 還るを追ひて已に知り、乃ち謂ひて曰く、「自ら去る可し」と。乃ち一の腕囊を以て根等に與へ、語りて曰く、「慎みて開くこと勿れ」と。是に於いて乃ち歸る。後出で行くに、家人 其の囊を開き視る。囊蓮花の如く、一重去れば、一重復たあり、五蓋に至り、中に小青鳥有りて、飛び去る。根 還りて此を知り、悵然たるのみ。後 根 田中に於いて耕す。家常に依りて之に餉るに、田中に在りて動かざるを見る。就きて視れば、但だ殻有りて蟬蛻の如きなり。」

「復有得婿者、往慶之。」とあるところを見れば、『幽明録』の話と対になつてゐるようでもある。なお、『玉燭寶典』(古逸叢書)卷八引『志怪』に「囊似蓮花、中有青鳥。」とあり、『志怪』にもこの話があつたようである。(『古小説鈎沈』では「雜鬼神志怪」第四話の鄧紹が華山に葉を採りに入つた話の中に、この二句を入れてゐるが、李劍國『唐前志怪小説輯釋』では「非是。」という。)

39 曹娥父溺死。娥見瓜浮、得屍。(類聚八十七) ※鄭晩晴輯注本一九三頁

【注釈】 曹娥 後漢の順帝の漢安(一四二—一四四)年間ごろの孝女。『後漢書』卷八四列女傳に伝がある。

瓜浮 曹娥が川に瓜を浮かべ、父の屍のあるところで沈むように神に告げたことをいう。

【訓読】 曹娥の父溺死す。娥 瓜の浮かぶを見て、屍を得。

【訳文】 曹娥の父が溺死した。娥は瓜の浮かぶのを見て、屍を見つけた。

【補説】 この話の詳細は、『世説新語』捷悟篇の魏武帝曹操が曹娥碑の文字について楊脩に尋ねる話の劉孝標注に引く晉・虞預撰『會稽典錄』に見える。

孝女曹娥者、上虞人。父盱、能撫節按歌、婆娑樂神。

漢安二年、迎伍君神、泝瀟而上、爲水所淹、不得其

尸。娥年十四、號慕思盱、乃投瓜于江、存其父尸曰、

「父在此、瓜當沈。」旬有七日、瓜偶沈。遂自投於

江而死。縣長度尚、悲憐其義、爲之改葬、命其弟子

鄧鄞子禮爲之作碑。(孝女曹娥は、上虞の人なり。

父の盱、能く節を撫し歌を按じ、婆娑して神を樂しましむ。漢安二年(一四三)、伍君神を迎へんとし、

瀟を泝りて上り、水の淹ふ所と爲り、其の尸を得ず。

娥 年十四、號びて盱を慕思し、乃ち瓜を江に投じ、

其の父の尸を存ひて曰く、「父 此に在らば、瓜當に

沈むべし」と。旬有七日にして、瓜偶たま沈む。遂

に自ら江に投じて死す。縣長の度尚、其の義を悲憐

し、之が爲に改葬し、其の弟子邯鄲子禮に命じて之が爲に碑を作らしむ。）

『類聚』卷七引『會稽典錄』によれば、父が祈禱中に溺死したのは、漢安二年の五月五日となっている。魯迅輯『會稽郡故書雜集』には、『世說新語』注の他に、『類聚』卷七・『御覽』卷三一・『事類賦注』卷四・『歲時廣記』卷二三・『嘉泰會稽志』卷一〇・『後漢書』注などから輯録している。

『後漢書』卷八四列女傳には、次のように記す。

孝女曹娥者、會稽上虞人也。父盱、能絃歌、爲巫祝。漢安二年五月五日、於縣江沂瀟娑娑迎神、溺死、不得屍骸。娥年十四、乃沿江號哭、晝夜不絕聲、旬有七日、遂投江而死。至元嘉元年、縣長度尚改葬娥於江南道傍、爲立碑焉。（孝女曹娥は、會稽上虞の人なり。父の盱、能く絃歌し、巫祝たり。漢安二年五月五日、縣江に於いて瀟を沂りて娑娑し神を迎へんとし、溺死し、屍骸を得ず。娥年十四、乃ち江に沿ひて號哭し、晝夜聲を絶たざること、旬有七日にして、遂に江に投じて死す。元嘉元年（一五一）に至り、縣長の度尚娥を江南の道傍に改葬し、爲に碑を立つ。）

唐・李賢注に、「娥投衣於水、祝曰、『父屍所在衣當沈。』衣隨流至一處而沈。娥遂隨衣而沒。『衣』字或作『瓜』。見項原列女傳也。」（娥衣を水に投じ、祝りて曰く、「

父の屍の在る所衣當に沈むべし」と。衣流れに隨ひ一處に至りて沈む。娥遂に衣に隨ひて沒す。『衣』字或いは『瓜』に作る。項原列女傳に見ゆ。）とあるので、曹娥が父の屍の在りかを捜すのに、異説があつたことがわかる。なお李賢注に引く『會稽典錄』には、度尚の弟子の邯鄲淳（字は子禮）が異才があり、碑文を書いたこと、後に蔡邕が傍らに八字を書き加えたことが記されている。

また、『異苑』卷一〇（第367話）「曹娥碑」には、

孝女曹娥者、會稽上虞人也、父盱、能絃歌爲巫。漢安帝二年五月五日、於縣江沂瀟迎娑娑神、溺死不得屍骸。娥年十四、乃緣江號哭、晝夜不絕聲、七日遂投江而死。三日後、與父尸俱出。至元嘉元年、縣長度尚、改葬娥於江南道傍、爲立碑焉。陳留蔡邕字伯喈、避難過吳、讀曹娥碑文、以爲詩人之作、無詭妄也。因刻石旁作、「黃絹幼婦、外孫齋白」八字。魏武見而不能子、以問群僚、莫有解者、有婦人流于江渚、曰、第四車解。既而禰正平也、衡即以離合義解之、或謂此婦人即娥靈也。

と記す。前半部分は、『後漢書』とほぼ同文で、後半は李賢注引『會稽典錄』の蔡邕が八字を添えた話に、曹操がそれを理解できず、禰衡が解説することなどが付け加えられている。後半部は、『世說新語』捷悟篇注引『異苑』と同じである。（續）